

# SD法による高齢者イメージの世代差と性差の研究

Study on generational and sexual differences  
of the images of elderly people by semantic differential method

西村純一（東京家政大学心理教育学科）

平澤尚孝（東京家政大学国際コミュニケーション科）

Junichi NISHIMURA (Tokyo Kasei University)

Naotaka HIRASAWA (Tokyo Kasei University)

## 要 旨

本研究では、5つの概念―「若者」「中年」「高齢者」「男性高齢者」「女性高齢者」に対するイメージの測定を行い、その世代差と性差について検討した。イメージの測定ではSD法―13対の形容詞対尺度の7段階評定を実施した。対象者は、大学生406名（男性89名、女性317名）、高齢者272名（男性126名、女性146名）であった。主な結果は次の通りである。

- 1 「高齢者」に対するイメージは、高齢群の方が若年群より、女性の方が男性よりそれぞれ肯定的であった。
- 2 活動性（アクティビティー）のイメージは、概ね「若者」>「中年」>「高齢者」の順に肯定的であった。ただし、高齢群の場合には、「中年」と「若者」にあまり差がなかった。
- 3 力動性（ポテンシャルティー）関連のイメージは、若年群も高齢群も「中年」がもっとも肯定的であった。
- 4 「あたたかい」は「高齢者」がもっとも肯定的であった。「親しみやすい」は、若年群では「若者」、高齢群では「高齢者」がそれぞれもっとも肯定的であった。
- 5 若年群も高齢群も、概して「男性高齢者」よりも「女性高齢者」をより肯定的にとらえていた。

In this study, we examined the generational and sexual differences by measuring the images of the 5 concepts: “young people”, “middle-aged people”, “elderly people”, “elderly men” and “elderly women”. For measuring the images, we conducted the assessment in 7 grades of 13 pairs of the adjectives versus the scales, for 406 university students (male: 89, female: 317) and 272 elderly people (male: 126, female: 146).

The major results are as follows:-

1. The image on the “elderly people” was more positive in the elderly groups than in the young groups, and also more positive in women than in men, respectively.
2. The image of activity was on the whole more positive in the order of “young people” > “middle-aged people” > “elderly people”. However, in the elderly groups, there were few degrees of differences between the “middle-aged people” and the “young people”.
3. The image related to potentiality was most positive in the “middle-aged people” for both the young groups and the elderly groups.
4. The image of “warmth” was most positive in the “elderly people”. The image of “friendliness” was most positive in the “young people” for the young groups, and also in the “elderly people” for the elderly groups, respectively.
5. Both the young groups and the elderly groups regarded the “elderly women” to be more positive than the “elderly men”.

キーワード：

Key Words : Images of elderly people, Sexual differences, Generation differences, Semantic differential method

## 1 問題

わが国の高齢化のスピード、その水準の高さはすさまじいものがある。平成20年には老年人口（65歳以上）の全国的水準は21%を超え、超高齢社会といわれる域に到達している。老年人口は年少人口（15歳未満）の全国的水準13.5%をはるかにしのぎ、少子高齢社会が現実のものとなっている。将来的には、老年人口の高齢化が進展し、後期高齢者（75歳以上）が急増していくと予測されている。

こうした超高齢社会への移行の過程で、私たちは増え続ける高齢者という社会的存在をどのように受け止めているのであろうか。65歳以上の層を高齢者として扱うとい

う概念的理解は社会的に普及し、今日様々な高齢者対策が65歳という年齢基準でつくられている。しかし、そうした暦年齢を基準とした概念的理解とは別に、高齢者という社会的存在をどのように感じているのかということが、今日の超高齢社会の有り様を探る上から重要になってきていると考えられる。古谷野（1993）は、「人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらには老人自身の自己概念や適応にも影響を及ぼす」と述べている。また、高齢者に対する否定的な年齢ステレオタイプ（岡・佐藤・池上、1999）は、高齢者への年齢差別（エイジズム）をもたらす危険性もあると指摘されている（Palmore, 1999）。

本研究では高齢者に対するイメージの観点から、超高齢社会における人々の高齢者への態度を探ることを意図している。わが国における高齢者のイメージに関する研究を概観すると、高齢者という言葉を使った研究よりも老人という言葉を使った研究が大部分を占めている。その主要な研究が若者の老人観に関する研究であるが、若者は老人の暗く、否定的な側面に注目しているということが多く報告されている。佐藤・長島(1976)は大学生500名を対象に老人イメージとしてあてはまる形容詞を自由記入によって収集したが、「さびしい・やさしい・古い・暗い・かわいそうな・悲しい・弱い」などがあげられた。守屋(1974)によると、女子短大生の多くにとって老人になることは心身の健康や若さが失われていくことを意味し、老年期は衰退・消滅期として、また人生の終わりとして受け止められている。また、守屋(1975)によると、女子短大生が「理想の老人」についていくイメージはきわめて肯定的であるが、「現実の老人」のイメージは、「理想の老人」のイメージの対極に位置し、否定的である。井上(1980)のSD法による調査においてもイメージは否定的な方向に傾き、とくに「地味な」「悲しい」「弱い」などが表れている。

他方、否定的イメージと並んで肯定的老人イメージについても報告されている。二宮・及川(1980)の学生の老人観の調査では、高齢者に対しての記述に「人生経験ではすばらしい」「尊敬している」などの肯定的なもの、「淋しそう」「活気がない」など否定的なもの両方が示された。保坂・袖井(1986)の大学生794名のSD法による調査では、老人の肯定的イメージとして「あたたかい」「優しい」、否定的イメージとして「弱い」「頑固」「消極的」などが示された。さらに、保坂・袖井(1988)の大学生567名を対象としたSD法の調査では、肯定的なイメージとして「あたたかい」「静かな」(さわがしいに対して)、「賢い」「優しい」、否定的なイメージとして「保守的」「地味な」「暇そう」「静的」(動的に対して)、「遅い」「灰色」「受動的」「弱い」「小さい」「非生産的」「鈍い」「強情」などが示された。全体としては否定的で、とくに身体的な強さや活動性、生産性についてはきわめて否定的であった。辻(2000)は、青年の高齢者に対するイメージには①好意的にみようとすタイプ、②好意的な面と否定的な面の両方を示すタイプ、③否定的にみるタイプ、④差別的な感情を示すタイプがあるとして、個人差に注目する必要性を示唆している。

このようにこれまでのSD法による老人イメージの研究の多くは大学生を対象に行われたもので、概して老人は否定的に評価されている。大学生以外を対象とした研究(中野, 1991; 中野・冷水・中谷・馬場, 1994)では、小中学生の老人イメージはとりあげる次元にかかわらず肯定的で、年齢が高くなるに伴って徐々に否定的になることを報告している。

井上(1980)は、老人がもつ老人イメージも、大学生や30～40歳の男性と同様に否定的であるとしている。他方、長嶋(1974)によれば、20～50歳代の成人の間では、「おとろえる」「あわれな」「さみしい」などの否定的な「概念的老化イメージ」を感じる度合いが年齢とともに低下し、若い人ほど否定的なイメージをもつと報告している。Collete-Pratt(1983)は若年期ほど老年期を否定的に評価することを明らかにしている。Ortmeyer(1983)は、公立学校教員の老人イメージは大学生とは異なり、中立的ないし肯定的であるとしている。

古谷野・児玉・安藤・浅川(1997)は45～64歳の男女565人を対象にSD法による老人イメージの測定を行い、中高年齢者の老人イメージは全体として中立的で、中立点よりわずかに肯定的な方向に偏っていることを示した。また、因子分析によって「力動性」「親和性」「洗練さ」の3次元を抽出し、男性より女性で力動性の評価が高く、高学歴者ほど力動性の評価が低いと報告している。古谷野らは児童、成人、老人の結果を総合的に考察し、幼児期には肯定的であった老人イメージが青年期にもっとも否定的になり、その後肯定的な方向に変化していくという老人イメージの加齢変化に関する仮説を述べている。しかし、65歳未満の中高年齢者を対象とした研究は行われている(古谷野ら, 1997)が、65歳以上の高齢者を対象とした研究はほとんどみられない。

そこで、本研究では大学生男女および老人大学の高齢男女を対象にSD法による高齢者に対するイメージの測定を行い、その世代差と性差について検討することとした。これまでの研究は、老人という言葉概念刺激としたイメージの研究がほとんどであり、高齢者という言葉概念刺激としたイメージの研究はあまり行われていない。若者の老人イメージが否定的に現れるという背景には、長い間に老人ということば自体にある種の「老人くささ」というマイナスイメージが付着しているということも考えられる。他方、高齢化社会、高齢社会、超高齢社会と進展するなかで、近年は、老人という言葉よりも高齢者という言葉のほうがニュートラルな言葉として定着してきているように思われる。しかし、高齢者という言葉も使われるようになってから久しく、ある種の「老人くささ」が付着してきているかもしれない。そうした言葉のニュアンスの問題もあるわけであるが、本研究では「老人」ではなく、敢えて「高齢者」という言葉を概念刺激として提示してSD法による測定を試みることにしたい。

また、これまでの研究を概観すると、「若者」「中年」「高齢者」という異なる世代のイメージを比較検討したものはあまりない。そこで、本研究では、「若者」「中年」「高齢者」の3つの概念のイメージを比較検討することを通じて、「高齢者」のイメージの特徴を浮き彫りにすることを意図して

いる。

また、わが国の男性の平均寿命はほぼ79歳であるのに対して、女性はほぼ86歳であり、差は7年にもなる。この差は決して小さいとは言えず、高齢者のイメージにも性差は様々に影響を及ぼしていると考えられる。そこで、本研究では、「男性高齢者」と「女性高齢者」のイメージの違いについても検討することを目的としている。

## 2 方法

### (1) 調査内容

本調査では「若者」「中年」「高齢者」「男性高齢者」「女性高齢者」「認知症高齢者」(提示順)という6つの概念に関するイメージをSD法 (semantic differential method) (岩下, 1985) を用いて測定した。「若者」「中年」「高齢者」の3つの概念は、「高齢者」のイメージを検討する上で、その特徴をより明らかにするために、他の世代のイメージとの比較を意図したものである。「男性高齢者」「女性高齢者」の2つの概念は、「高齢者」に対するイメージを「男性高齢者」と「女性高齢者」に分けて比較分析するために用意された。いまひとつ「認知症高齢者」は、一般的な「高齢者」と比較して「認知症高齢者」に対してどのようなイメージをいっているのかを検討するべく加えられたものであるが、本研究では「認知症高齢者」を除く5つの概念に関するイメージについて分析する。「認知症高齢者」の

イメージについては、機会を改めて分析することとしたい。

これら6つの概念に関して、下に示すような13の形容詞対に対する7段階評定のSD法を実施した。7段階評定に際しては、形容詞対の間のスケール上の位置を表す1から7の数字で示し、その一つを選択する方式をとった。各段階は数値のみ示し、カテゴリーはとくに付していない。また、回答しやすさに配慮し、左に否定的な形容詞、右に肯定的な形容詞を配置し、肯定的なほど数値が大きくなるようにした。

調査表には、このほかにイメージとの関連を検討すべく、パルモアのエイジング・クイズ (日本の実情に合わせて一部改定) とフェースシートが含まれる。フェースシートは、イメージに関連する要因として、年齢、性別、祖父母との同居経験 (学生のみ)、高齢者に関わるボランティアや実習経験 (学生のみ)、高齢者問題に対する関心、何歳以上を高齢者とするか、認知症 (旧称: 痴呆症) の病気についての知識、認知症の人との接触経験などについて質問した。ただし、本研究では、これらの変数のうち年齢 (世代) 及び性別をとりあげて検討する。

### (2) 調査対象者と調査手続き

首都圏のA女子大学の女子学生及びB共学大学の男女学生の協力を得て、授業終了後に教室で集合調査を実施した。また、首都圏のC市の老人大学の受講生の協力を得て留め置きで調査を実施した。調査は、平成19年10月から

### 質問表

■ 「若者」、「中年」、「高齢者」、「性的高齢者」、「女性の高齢者」、「認知症高齢者」に対してのイメージについておうかがいします。

それぞれについて、次のような形容詞対の間で段階的に評定するとしたら、どの程度だと感じますか？ 7段階のうち1つに○をつけてください。

#### 「若者」について

① 親しみにくい	1	2	3	4	5	6	7	親しみやすい
② 弱い	1	2	3	4	5	6	7	強い
③ 貧しい	1	2	3	4	5	6	7	豊か
④ 暗い	1	2	3	4	5	6	7	明るい
⑤ 依存的	1	2	3	4	5	6	7	自立的
⑥ つめたい	1	2	3	4	5	6	7	あたたかい
⑦ 孤独な	1	2	3	4	5	6	7	にぎやかな
⑧ 遅い	1	2	3	4	5	6	7	早い
⑨ 無能な	1	2	3	4	5	6	7	有能な
⑩ 静かな	1	2	3	4	5	6	7	さわがしい
⑪ 活動的でない	1	2	3	4	5	6	7	活動的である
⑫ 悪い	1	2	3	4	5	6	7	良い
⑬ さわやかでない	1	2	3	4	5	6	7	さわやかである

平成 20 年 8 月にかけて実施された。年齢及び性別いずれかの記入のないものは無効として分析から除外することとした。また、SD法の調査に若干の欠測のあるものは分析に含めたが、欠測がかなり多いものは無効として除外することとした。その結果、12名のデータを分析から除外し、残る学生 406 名（男子学生 89 名、女子学生 317 名、平均 20.4 歳、標準偏差 1.6 歳）、高齢者 272 名（男性 126 名、女性 146 名、平均は 64.9 歳、標準偏差 5.2 歳）であった。

### 3 結果と考察

#### (1) 「高齢者」に対するイメージの若年群と高齢群の比較

以下、大学生を若年群、老人大学の受講生を高齢群と呼ぶ。図 1 は、若年群と高齢群の「高齢者」に対する評定平均値によるプロフィールを比較したものである。また、表 1 は「高齢者」の世代別・性別評定平均値と標準偏差ならびに分散分析の結果を示したものである。まず、評定平均値の高さに注目すると、高齢群は「遅い」で若干否定的方向に偏っているが、そのほかは中立点ないしはそれ以上である。とくに「親しみやすい」「あたたかい」「良い」「有能な」「豊か」「自立」などはやや肯定的方向に偏っている。したがって、高齢群は「高齢者」に対して否定的イメージはあまりなく、むしろ肯定的イメージをいんでいるといえる。

他方、若年群はかなり否定的な方向に振れているものが多い。とくに「遅い」「弱い」「静かな」（さわがしいに対するものなので一概に否定的ともいえないが、活動性が乏しいという意味では否定的）が目立つが、「活動的でない」「孤独な」「さわやかでない」「依存的な」などもやや否定的である。しかし、「あたたかい」「親しみやすい」「良い」「有能な」などは肯定的な方向に偏っており、「豊か」「明るい」

などは中立的である。したがって、若年群は高齢群に比べると「高齢者」に対して否定的イメージをもつ傾向が多いが、肯定的イメージをいんでいる部分もあるといえる。

項目ごとの両群の差に注目すると、大部分の項目で高齢群が若年群に比して肯定的であり、この傾向は統計的に有意である。ただし、「明るい」「有能な」には世代差はみられない。

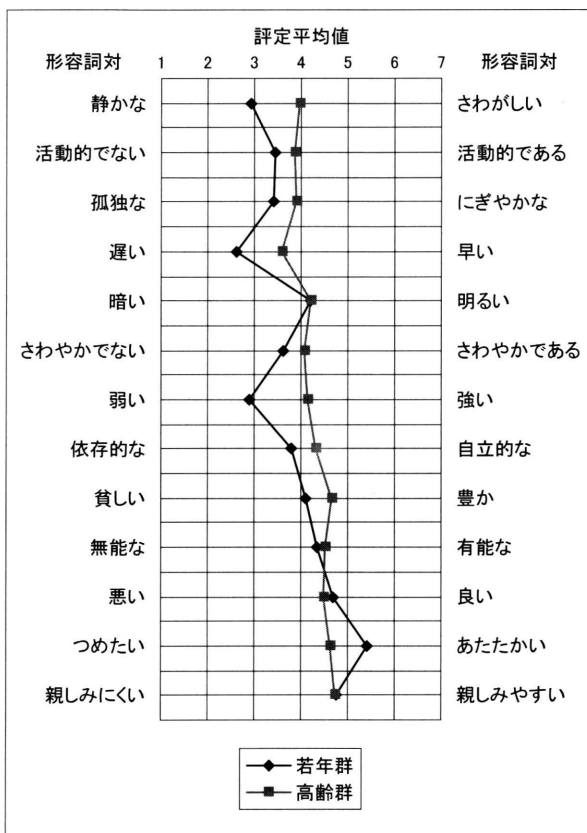


図 1 「高齢者」の評定平均値の若年群と高齢群の比較

表 1 「高齢者」の世代別・性別評定平均値と標準偏差

形容詞対	男性若年群		女性若年群		男性高齢群		女性高齢群		分散分析の結果		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	世代差	性差	世代差 × 性差
静かな—さわがしい	2.8	1.4	3.0	1.0	3.9	1.0	4.0	1.0	高>若***		
活動的でない—活動的である	3.5	1.6	3.4	1.1	3.8	1.1	3.9	1.2	高>若***		
孤独な—にぎやかな	3.2	1.4	3.5	1.2	3.8	1.1	4.0	1.2	高>若***	女>男*	
遅い—早い	2.6	1.3	2.6	1.0	3.5	1.0	3.7	1.0	高>若***		
暗い—明るい	4.1	1.2	4.3	1.0	4.1	1.1	4.3	1.0		女>男*	
さわやかでない—さわやかである	3.7	1.5	3.6	1.1	4.1	1.1	4.1	1.0	高>若***		
弱い—強い	3.0	1.5	2.9	1.2	3.9	1.2	4.3	1.1	高>若***		*
依存的な—自立的な	3.8	1.6	3.8	1.1	4.3	1.1	4.4	1.1	高>若***		
貧しい—豊か	4.1	1.4	4.1	1.2	4.5	1.2	4.8	1.0	高>若***		
無能な—有能な	4.1	1.4	4.4	1.1	4.4	1.0	4.6	1.0	高>若**	女>男*	
悪い—良い	4.6	1.3	4.7	1.0	4.3	1.0	4.6	1.0	若>高*	女>男*	
つめたい—あたたかい	5.2	1.2	5.5	1.1	4.4	1.1	4.8	1.0	若>高***	女>男***	
親みにくい—親しみやすい	4.8	1.6	4.8	1.3	4.6	1.2	4.8	1.2			

高：高齢群 若：若年群 女：女性 男：男性 \*\*\* p < 0.001 \*\* p < 0.01 \* p < 0.05

高齢群の方が若年群より肯定的であるという結果は老人イメージの多くの先行研究の結果と符合している。しかし、若年群はすべて否定的イメージというわけではなく、部分的に肯定的イメージをいだいている。この点もこれまでのいくつかの研究において示されている。

なお、「あたたかい」「良い」「有能な」「明るい」「にぎやかな」などにおいて、女性が男性より有意に肯定的である傾向が見出された。また、「強い」では世代差と性差の交互作用がみられた。これは若年群では男女差はあまりないが、高齢群では男性より女性が肯定的であることを示している。このような傾向は、女性のほうが男性よりも高齢者を受容的に見ていることを示していると考えられるが、それがどのような理由によるかは本研究からは一概にいえな

## (2) 「若者」「中年」「高齢者」のイメージの比較

「高齢者」のイメージを「若者」や「中年」のイメージと比較することによって、「高齢者」のイメージの特徴について検討する。また、煩雑になるため、若年群と高齢群に分けて比較することとした。図2-1および図2-2は、若年群と高齢群に分けて、それぞれにおける「若者」「中年」「高齢者」の評定平均値のプロフィールを示したものである。また、表2-1および表2-2は、若年群と高齢群に

分けて、それぞれにおける「若者」「中年」「高齢者」の評定平均値と標準偏差ならびに分散分析の結果を示したものである。

これら全体としてみると、若年群と高齢群における「若者」「中年」「高齢者」の相対的關係のイメージは基本的には違ってはいないと思われるが、いくつかの点で違いも認められる。

第一は、若年群の方が高齢群に比べて項目ごとの評定平均値の最高と最低の幅が大きく、若年群は高齢群に比べてイメージの相対的違いを大きくとらえる傾向があるのに対して、高齢群は若年群に比べて項目ごとの評定平均値の最高と最低の幅が小さく、高齢群は若年群に比べてイメージの相対的違いを小さめに捉える傾向がある。こうした傾向は比較的明瞭であるが、高齢群が若年群に比べてイメージの相対的違いの認知的評価が曖昧になってきているためなのか、高齢群が若年群に比べて評価に抑制が効いていて、中心化傾向が強く現れているためなのか、ここからはわからない。

第二に、そのこととも関連しているが、高齢群は若年群に比べて極端に高い評定値を得ることも少ない代わりに、極端に低い評定値をとることも少ない。したがって、若年群では「高齢者」に対して「静かな」（活動性が低いという意味では否定的ととれる）、「孤獨な」「孤獨な」「遅い

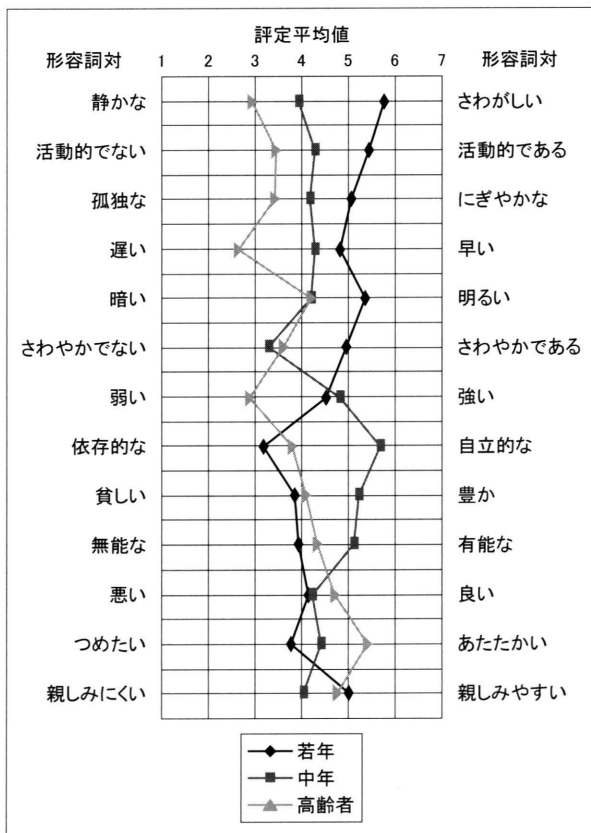


図2-1 若年群における「若者」「中年」「高齢者」の評定平均値

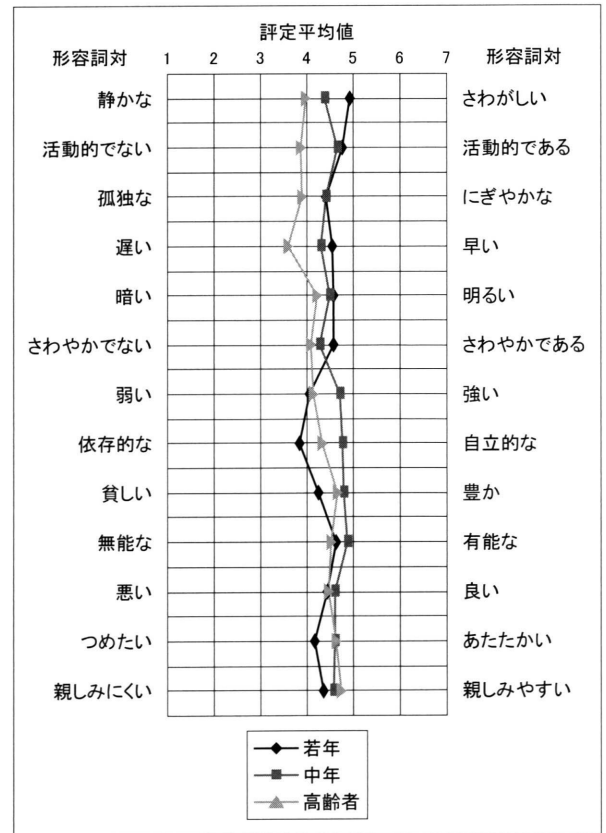


図2-2 高齢群における「若者」「中年」「高齢者」の評定平均値

い」「弱い」などで明白な否定的評定を示しているのに対して、高齢群では「高齢者」に対する明白な否定的評価はほとんどなく、わずかに「遅い」でやや否定的評定がみられるのみである。逆に、若年群では「若者」に対して「さわがしい」(活動的という意味では肯定的)、「活動的である」「にぎやかな」「早い」「明るい」「さわやかである」などでかなりの肯定的評価を示しているが、高齢群は「若者」のそれらの側面を肯定的に評価しつつも、それほど高く評価しているわけでもない。また、若年群の場合には、これらの「若者」イメージは「中年」のイメージに比べて明瞭に高いのに対して、高齢群の場合には「若者」イメージと「中年」イメージが接近しており、「活動的である」「にぎやかな」「明るい」などにおいてはほとんど同じ程度になっている。これは、「若者」も「中年」も自分たちよりは若い世代と

してとらえ、両者の違いをさほど区別していないように思われる。

第三は、多重比較の結果から、イメージが「若者」>「中年」>「高齢者」のように世代順になる項目をみると、若年群においては「さわがしい」「活動的である」「にぎやかな」「早い」「さわやかである」など指摘できるが、高齢群では「さわがしい」「早い」のわずか2項目にすぎない。高齢群では「活動的である」「にぎやかな」「明るい」などは「若者」と「中年」のイメージの差は認められない。したがって、若年群は外見的活動性を概ね世代順にイメージする傾向があるのに対して、高齢群は「若者」も「中年」も自分たちより若い世代としてそれほど区別していない傾向があるように思われる。

第四は、「強い」「自立的な」「豊か」「有能な」などの項

表2-1 若年群における「若者」「中年」「高齢者」の評定平均値と標準偏差

概念	若者		中年		高齢者		分散分析の結果	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
静かなーさわがしい	5.8	1.1	3.9	1.2	2.9	1.1	***	若>中>高
活動的でないー活動的である	5.4	1.3	4.3	1.2	3.5	1.2	***	若>中>高
孤独なーにぎやかな	5.1	1.4	4.2	1.1	3.4	1.2	***	若>中>高
遅いー早い	4.8	1.5	4.3	1.1	2.6	1.1	***	若>中>高
暗いー明るい	5.4	1.3	4.2	1.0	4.2	1.0	***	若>中、若>高
さわやかでないーさわやかである	5.0	1.2	3.9	1.1	3.6	1.2	***	若>高>中
弱いー強い	4.5	1.4	4.8	1.2	2.9	1.3	***	中>若>高
依存的なー自立的な	3.2	1.3	5.7	1.2	3.8	1.2	***	中>高>若
貧しいー豊か	3.8	1.3	5.2	1.1	4.1	1.2	***	中>高>若
無能なー有能な	3.9	1.2	5.1	1.1	4.3	1.1	***	中>高>若
悪いー良い	4.1	1.1	4.2	1.0	4.7	1.0	***	高>若、高>中
つめたいーあたたかい	3.7	1.1	4.4	1.2	5.4	1.1	***	高>中>若
親しみにくいー親しみやすい	5.0	1.4	4.0	1.3	4.7	1.3	***	若>高>中

\*\*\* p<0.001 若:若者 中:中年 高:高齢者 >: p<0.05

表2-2 「若者」「中年」「高齢者」の評定値の平均と標準偏差

概念	若者		中年		高齢者		分散分析の結果	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
静かなーさわがしい	4.9	1.0	4.4	0.9	4.0	1.0	***	若>中>高
活動的でないー活動的である	4.8	1.2	4.6	1.0	3.9	1.2	***	若>高、中>高
孤独なーにぎやかな	4.4	1.1	4.4	0.9	3.9	1.1	***	若>高、中>高
遅いー早い	4.5	1.3	4.3	0.9	3.6	1.0	***	若>中>高
暗いー明るい	4.6	1.2	4.5	1.0	4.2	1.0	***	若>高、中>高
さわやかでないーさわやかである	4.6	1.1	4.3	0.9	4.1	1.0	***	若>中、若>高
弱いー強い	4.1	1.2	4.7	1.0	4.1	1.2	***	中>若、中>高
依存的なー自立的な	3.8	1.1	4.8	1.0	4.3	1.1	***	中>高>若
貧しいー豊か	4.3	1.1	4.8	1.0	4.7	1.1	***	中>若、高>若
無能なー有能な	4.6	1.1	4.9	0.9	4.5	1.0	***	中>若、中>高
悪いー良い	4.4	1.0	4.6	0.9	4.5	0.9	***	
つめたいーあたたかい	4.2	1.0	4.6	0.9	4.6	1.0	***	高>若、中>若
親しみにくいー親しみやすい	5.0	1.4	4.0	1.3	4.7	1.3	***	若>高>中

\*\*\* p<0.001 若:若者 中:中年 高:高齢者 >: p<0.05

目では「中年」イメージがトップであり、この傾向は若年群も高齢群も一致している。ただし、第2位以降の順位が若年群と高齢群とで食い違っている。若年群では、「強い」は「若者」が第二位であるが、「自立的な」「豊かな」「有能な」などは「高齢者」が第二位であり、高齢者のほうが若者より自立的で豊かで有能であるととらえている若年者が多いことを示している。これまで概して否定的とみられた若年群が、高齢者の力動性の側面をかなり肯定的に評価しているという点は注目に値する。超高齢社会では、高齢者は一方的に養護される存在ではなく、社会の主体としてみずから支える側に立つことも要請されてくると考えられる。若年群はそうした超高齢社会の高齢者観をすでに感じ取っているのかもしれない。

他方、高齢群では、「高齢者」は「自立的」では「中年」に次、「豊かな」では「中年」に並び、「若者」より優位にあるイメージされているが、「強い」「有能」では「若者」と「高齢者」に差はないと感じているようである。このように高齢群は若年群とはやや違った高齢者観をもっているとみられる。これは、若者は成長過程にあり、自立度・経済的豊かさ・能力などで中年や高齢者に比べて劣っているとみずから謙虚に認識しているのに対して、高齢者はその人生経験をふまえて「強さ」や「有能さ」をかなり幅広く解釈する傾向があり、そうした解釈の差を反映しているよ

うに思われる。

第五に、「高齢者」のイメージは常に「若者」や「中年」のイメージより低いわけではなく、項目によっては最高の評価を得ていることが示された。若年群で「良い」「あたたかい」で「高齢者」がトップになることが示された。これまでも「あたたかい」「静かな」「賢い」「優しい」などに対する若年群の肯定的傾向については報告されているが（保坂・袖井，1988）、高齢群において「あたたかい」で「中年」とならんで「高齢者」がトップであることが見出された。また、「親しみやすい」は若年群では「若者」がトップであるが、高齢群では「高齢者」がトップである。このように若年群においても高齢群においても比較的肯定的な高齢者像が得られたということは、今回の調査が老人という言葉を使わずに、高齢者という言葉を用いたことも影響しているように思われる。また、「若者」「中年」「高齢者」と比較するかたちで測定した結果、老人イメージというよりは代代的なイメージの特徴がより強調される結果になっているかもしれない。

(3) 「男性高齢者」と「女性高齢者」のイメージの比較  
一口に「高齢者」といっても男性と女性とでは平均寿命に7年もの差があり、そうした違いがイメージに影響している可能性がある。そこで、本研究では「男性高齢者」と「女

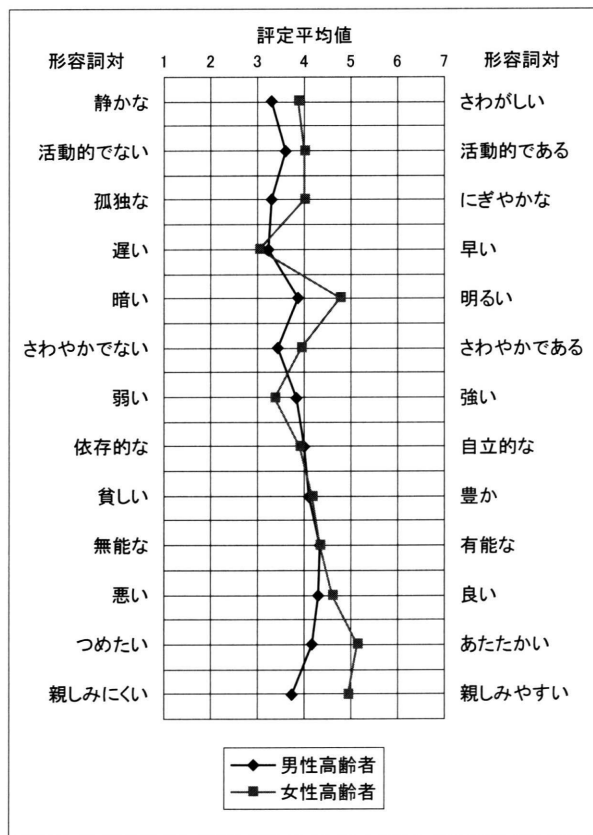


図3-1 若年群における「男性高齢者」「女性高齢者」の評定平均値

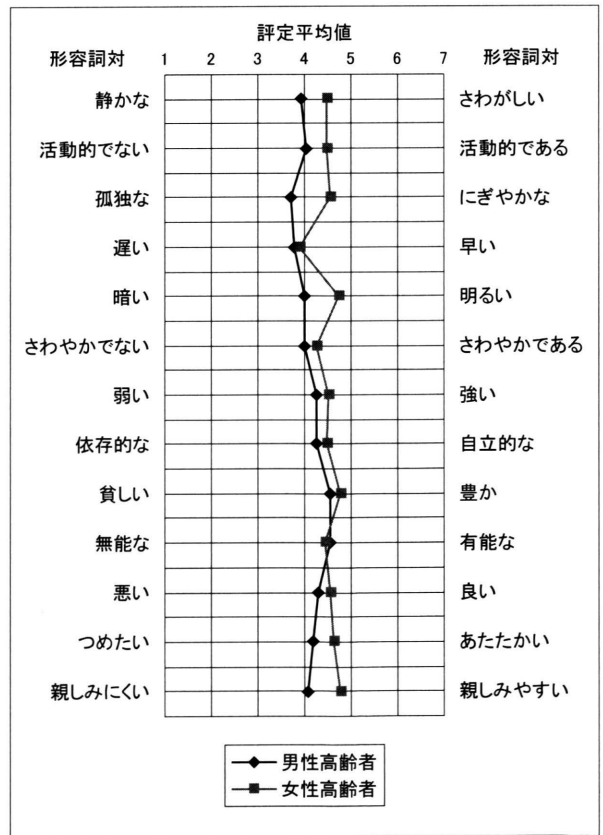


図3-2 高齢群における「男性高齢者」「女性高齢者」の評定平均値



性高齢者」に分けてそのイメージの違いを比較することとした。図3-1および図3-2は、若年群と高齢群に分けて、それぞれにおける「男性高齢者」「女性高齢者」の評定平均値のプロフィールを示したものである。また、表3は、「男性高齢者」と「女性高齢者」に分けて、それぞれにおける若年群と高齢群の評定平均値と標準偏差ならびに分散分析の結果を示したものである。

これら全体としてみると、若年群と高齢群における「男性高齢者」と「女性高齢者」の相対的関係のイメージは基本的には違っていないと思われるが、一部違いも認められる。

第一は、概して「男性高齢者」よりも「女性高齢者」をより肯定的に評価する傾向があり、そうした傾向は若年群においても高齢群においても示された。このことは、平均寿命に象徴されるように、全体として男性高齢者よりも女性高齢者のほうが長寿であることなどが影響しているとみられる。ただし、若年群では「遅い」「弱い」「自立的」において、「女性高齢者」の方が「男性高齢者」よりも否定的にとらえられていた。また、高齢群では「遅い」「自立的」「有能な」において「男性高齢者」と「女性高齢者」のイメージに差は認められない。

第二に、概して若年群は高齢群に比べて否定的に評定する傾向が示された。ただし、「遅い」「弱い」「自立的な」「有能な」では世代差は認められなかった。とくに、若年群は「男性高齢者」の「静かな」(活動性が低いという意味で否定的)、「活動的でない」「孤独な」「遅い」「さわやかでない」などで否定的に評価する傾向が示された。若年群は「女性高齢者」に対しては概ね中立点以上に評価しているが、「遅い」「弱い」などは否定的に評定していた。それに対して、高齢群は、「男性高齢者」もほとんどの項目で中立点以上に

評定しており、わずかに「孤独な」でやや否定的評定をしている。このようにみえてくると、若年群は高齢群に比して「高齢者」に対して否定的イメージを持ちやすい傾向があるが、とりわけ「女性高齢者」よりも「男性高齢者」に対して否定的イメージを持つ傾向が多いといえよう。このことは、平均寿命等の男女差が高齢者イメージに与える影響は、すでに高齢の域にある人々よりも、高齢の域にはまだ距離のある若い人々に対して大きいことを示唆している。

#### 4 全体的考察

これまでの研究では、若年群の「老人」に対するイメージは否定的傾向が多いといわれてきた。たしかに、若年群は活動性の側面を中心に「高齢者」に対する否定的イメージが多い傾向が示された。しかし、本研究では、若年群も「高齢者」に対して否定的イメージだけをいっているわけではなく、肯定的イメージも少なからずもっていることが示された。これには、概念刺激として「老人」という言葉を使わずに、ニュートラルな「高齢者」という言葉を使用したことが少なからず影響したものと思われる。しかし、この点を明らかにするためには、「老人」と「高齢者」という二つの言葉のイメージの比較を実証的に行ってみる必要がある。

また、今回の結果は、サンプリングの問題も考慮する必要があるように思われる。今回の若年群のデータ収集は女子大学を中心に行われ、結果的に女子学生のデータに大きく偏っている。したがって、若年群のデータではあるが、女子学生の感じ方を色濃く反映している可能性があり、男子学生のデータをさらに補充して検証してみる必要が残されているように思われる。また、高齢者群のデータも老人

表3 若年群と高齢群の「男性高齢者」「女性高齢者」の評定平均値の比較

概念	男性高齢者		女性高齢者		分散分析の結果		
	若年群	高齢群	若年群	高齢群	概念	世代	概念×世代
形容詞対							
静かなーさわがしい	3.3 (1.2)	3.9 (0.9)	3.9 (1.3)	4.5 (1.1)	女>男***	高>若***	
活動的でないー活動的である	3.6 (1.3)	4.0 (1.1)	4.0 (1.4)	4.5 (1.2)	女>男***	高>若***	
孤独なーにぎやかな	3.3 (1.1)	3.7 (1.0)	4.0 (1.3)	4.5 (1.2)	女>男***	高>若***	
遅いー早い	3.2 (1.1)	3.8 (0.9)	3.0 (1.1)	3.9 (1.0)		高>若***	**
暗いー明るい	3.9 (1.1)	4.0 (1.0)	4.8 (1.1)	4.7 (1.1)	女>男***		
さわやかでないーさわやかである	3.4 (1.1)	4.0 (1.1)	3.9 (1.1)	4.3 (1.0)	女>男***	高>若***	
弱いー強い	3.8 (1.2)	4.2 (1.1)	3.4 (1.4)	4.5 (1.3)		高>若***	
依存的なー自立的な	4.0 (1.3)	4.3 (1.1)	3.9 (1.3)	4.5 (1.1)		高>若***	*
貧しいー豊か	4.1 (1.2)	4.5 (1.1)	4.2 (1.3)	4.8 (1.1)	女>男*	高>若***	
無能なー有能な	4.3 (1.1)	4.5 (1.0)	4.3 (1.1)	4.5 (0.9)		高>若**	
悪いー良い	4.3 (1.0)	4.3 (0.9)	4.6 (1.0)	4.5 (0.9)	女>男***		
つめたいーあたたかい	4.2 (1.2)	4.2 (1.0)	5.1 (1.1)	4.6 (1.0)	女>男***	若>高***	***
親しみにくいー親しみやすい	3.7 (1.4)	4.1 (1.3)	4.9 (1.3)	4.8 (1.1)	女>男***		**

カッコ内は標準偏差 \*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05

大学の受講生であるため、地域社会の比較的健康的な活動的な高齢者が多く、そうした傾向が強く表れている可能性があるといえる。そうした意味では、今回の結果はあくまで得られたデータの範囲内での結果であって、その一般化にはさらなる検証が必要である。

従来の研究では「老人」のみを概念提示しているものが多いのに対して、本研究では、「若者」「中年」「高齢者」を概念として提示し比較検討した。その結果、「老人」のみを概念提示したものに比べると、「高齢者」だけでなく、「若者」「中年」を含む各世代の特徴がそれなりに反映されているように思われる。古谷野らは、幼児期には肯定的であった老人イメージが青年期にもっとも否定的になり、その後肯定的な方向に変化していくという老人イメージの加齢変化に関する仮説を述べているが、本研究の結果からみると、それぞれの世代に関する社会的文化的文脈で、それぞれの世代の特徴が現れているように思われる。

また、本研究では「男性高齢者」よりも「女性高齢者」の方に肯定的イメージが多いことが示された。この背景には、女性の平均寿命が男性よりも7年も長く、「女性高齢者」の方が「男性高齢者」よりも健康で活動的イメージが社会的に強いためと推察される。今回の調査では高齢者の年齢範囲を限定していないが、若年群も高齢群もおそらくは比較的健康的な活動的な前期高齢者をイメージして回答しているように思われる。しかし、後期高齢者になると一般的に虚弱で活動性が乏しくなるだけでなく、健康・体力的には女性よりも男性の方が優れているという「性の逆転」という話もある。かりにそうした後期高齢者の男女の差が社会的にもよく知られるようになれば、「男性高齢者」と「女性高齢者」のイメージにも少なからず影響を及ぼすことになろう。

最後に、「高齢者」の否定的イメージの解釈について一言述べておきたい。たとえば、若年群のもっとも否定的な評定に「遅い」という項目がある。これは「早い」に比べて否定的と解釈されるわけであるが、遅いことは社会的文化的文脈からすると決して悪いことではない。ただちに行動に移すことが常に良いとは限らず、慎重に時間をかけて適切な行動を選択するということが重要な場合もあろう。超高齢社会では、「遅い」ということを否定的にとらえる考え方を払拭し、スローなことや時間をかけたことをもっと尊重する考え方が大切なのではなかろうか。

#### 謝辞

本調査の実施にあたっては、狭山市の高齢社会を支える会の関係者の皆様、狭山市シニアコミュニティカレッジの受講生の皆様、東京家政大学ならびに東洋大学の学生の皆様、多くの方々からあたたかいご協力とご支援を賜りました。記して深甚の謝意

を表するしだいで。

#### 引用文献

- Collete-Pratt 1976 Attitudinal predictors of devaluation of old age in a multigenerational sample. *Journal of Gerontology*, 31:193-197.
- 保坂久美子・袖井孝子 1986 大学生の老人観 老年社会科学 Vol.8, 103-116.
- 保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ：SD法による分析, 社会老年学 Vol.27, 22-33.
- 井上勝也 1980 老人の死生観 井上勝也・長嶋紀一(編) 老年心理学 朝倉書店 183-202.
- 岩下豊彦 1985 SD法によるイメージの測定 川島書店.
- 古谷野亘 1993 老いに対する態度 柴田博・芳賀博・長田久雄他(編) 老年学入門 川島書店 177-184.
- 古谷野亘・児玉好信・安藤孝敏・浅川達人 1997 中高年のイメージ—SD法による測定—老年社会科学 18:147-152.
- 守屋国光 1974 女子短大生の老年像 目白学園女子短期大学紀要 11, 83-90.
- 守屋国光 正常心理 長谷川和夫・賀集竹子 1975 老人心理へのアプローチ 医学書院 24-45.
- 長嶋紀一 1974 老化イメージについて, 亜細亜大学教養部紀要, 9:39-55.
- 中野いく子 1991 児童の老人イメージ：SD法による測定と要因分析, 社会老年学, 34:23-36.
- 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子 1994 小学生と中学生の老人イメージ：SD法による測定と比較, 社会老年学, 39:11-22.
- 二宮盈子・及川百合子 1980 大学生の老後観について(その1) 国立音楽大学研究紀要 15:89-102.
- 岡隆・佐藤達哉・池上知子 1999 現代のエスプリ：偏見とステレオタイプの心理学 至文堂
- Ortmeyer, L. E. 1983 Elementary public school teachers' attitudes toward elderly women and men: Sex stereotype? *Gerontology and Geriatric Education*, 4:111-117.
- Palmore, E. B. 1999 *Agism: Negative and Positive 2nd Edition*, New York: Springer 鈴木研一(訳) エイジズム 明石書店.
- 佐藤泰道・長嶋紀一 1976 老化イメージ(4) 大学生による老人のイメージ 浴風会調査研究紀要 73-76.